

音の“彫刻家”その知られざる世界

最も身近なものであるはずの楽譜はどのようなようにして作られるのか？



●取材協力／小原洋一（代表・小原洋一氏）
日本楽譜浄写協会（会長・沢井千賀蔵氏）
／写真・雨宮秀也

「楽譜浄写」という言葉をご存知だろうか？ つまり楽譜印刷のための版下制作の仕事である。

皆さんが目にする楽譜は、それが手書きのものでない限りはすべて、この楽譜浄写職人の手になるものだ。

作曲家や編曲家が原稿を書く。その原稿を元に、それをレイアウトし直し、白い台紙に五線をひき、その上に一音一音丹念にオタマジヤクシを刻印していく。この一連の専門化された作業を、楽譜浄写と呼ぶ。優美な曲線を描くト音記号、たっぷりとした版らみをもつ音符の玉、流れるようなスラー……楽譜上のすべての音楽記号は、この人たちの手仕事のなせる技なのである。

現在 日本でこの楽譜浄写を職業とする人は決して多くはない。日本楽譜浄写協会に加盟している人（中堅からベテランが多い）は約20名。ほとんどの人が東京に仕事場を持つ。同協会会長の沢井千賀蔵氏の話によれば、
「この方たち以外にも独立して仕事をしている人がいるが、全体を合わせても40〜50名程度でしょう。」

さて、今回の取材に当たってその舞台裏を公開してくれた方は、東京・世田谷

に仕事場をもつ小原洋一さん（写真右）。この道16年のベテランだ。実は小原さんはトラムベット・ブレイヤーでもあり、ピアノ・トリオやフルバンドを組織している「バイパー」である。また、同じ世田谷に音楽教室も開いている。

小原さんはアレンジの仕事を通してこの世界を知ったそうだ。
「この世界には代々受け継がれた流派のようなものがありますね。僕はそのひとつの黒田楽譜という所で修業させてもらったんです。高度な塾練が要求される世界だから、複雑な仕事をきちんとこなすには10年かかると言われています。」
小原さんに仕事の手順を披露してもら

う前に、この世界の歴史をざっと跡づけてみよう。

それはグーテンベルクが印刷機を発明した15世紀中葉まで遡ることができると言っても楽譜印刷は、史上最初の印刷物である聖書印刷とほぼ同時期に行われているからだ。

グーテンベルクの時代、印刷機にかけられる原稿は木版だった。だから楽譜も木版にじかに彫られていた。16世紀になってこの木版は金属板にとってかわられる。

より精巧な仕上がりを得るためだ。が、依然として楽譜は手で彫られることに変わりがなく非能率的であった。この時代

作曲家自身もノミをふるったそうである。

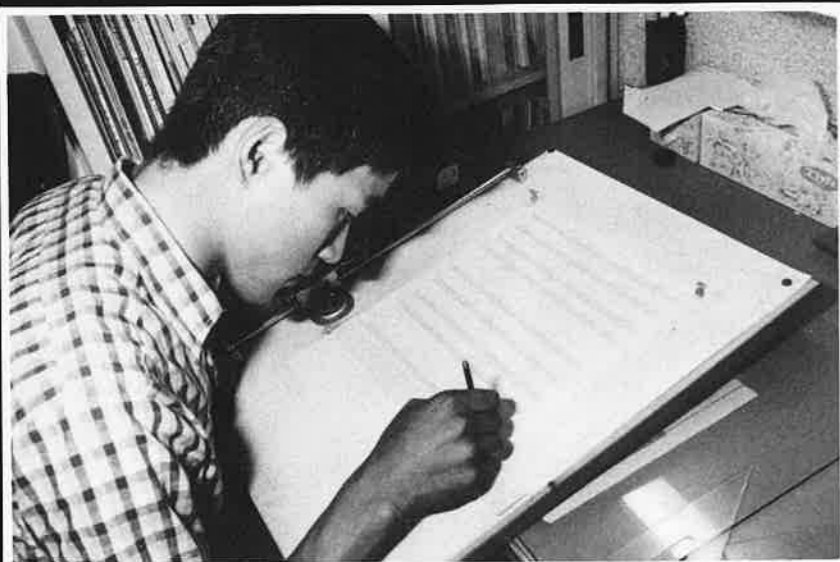
18世紀初頭になると、音符の玉や各種記号をポンチで金属板に打印する技法が考案される。これによって仕事はぐっと能率的になり、音符や記号も整然と統一され、より見やすい楽譜が生まれることになった。この技法は瞬く間にヨーロッパ中に広まり、以後今世紀に至るまで受け継がれてくるのである。

日本ではしかし、この金属板の技法は定着しなかったといわれる。浮世絵などに見られる木版画の技法が発達し過ぎたためだろう。沢井さんの話によれば、ハノコを彫ると同じく木版に逆版で彫りつけていたそうである。戦前の国定教科書

に見られる楽譜などはすべて、この木版によるものだという。

いずれにしてもここまでの技法は、彫る、という点では共通している。が、現在では、この彫る作業は一切不要。写真製版技術が発達したためだ。つまり、白い台紙に黒インクで線をひく、または判で押すという作業で楽譜の版下は作られていくのである。その仕上がりは、印刷された楽譜と全く同じである。しかし、この作業とても高度に専門化されたものであることには変わりがない。

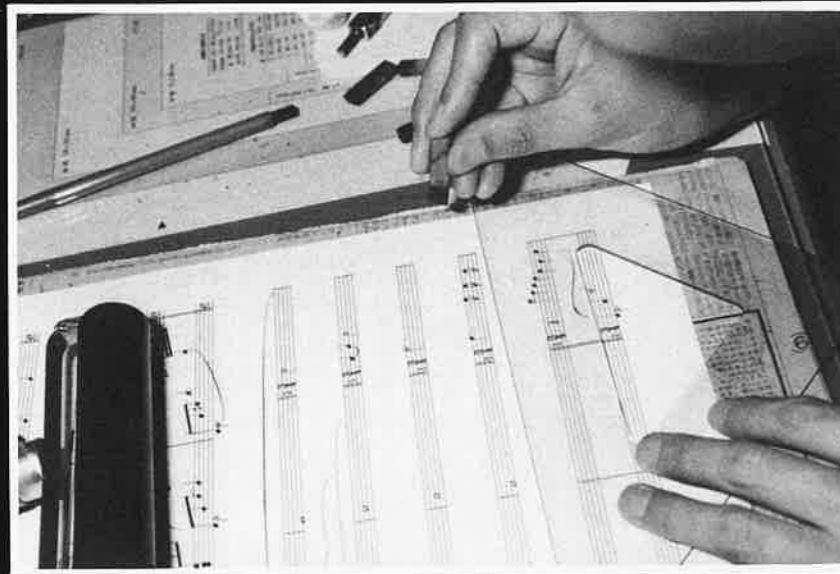
この仕事の三種の神器は、定規（各種雲形も含む）、カラス口、それに職人さ



台紙に五線をひく。この定規はボタンで自動的に五線間隔に雷送りされる。これも機械化のひとつ。

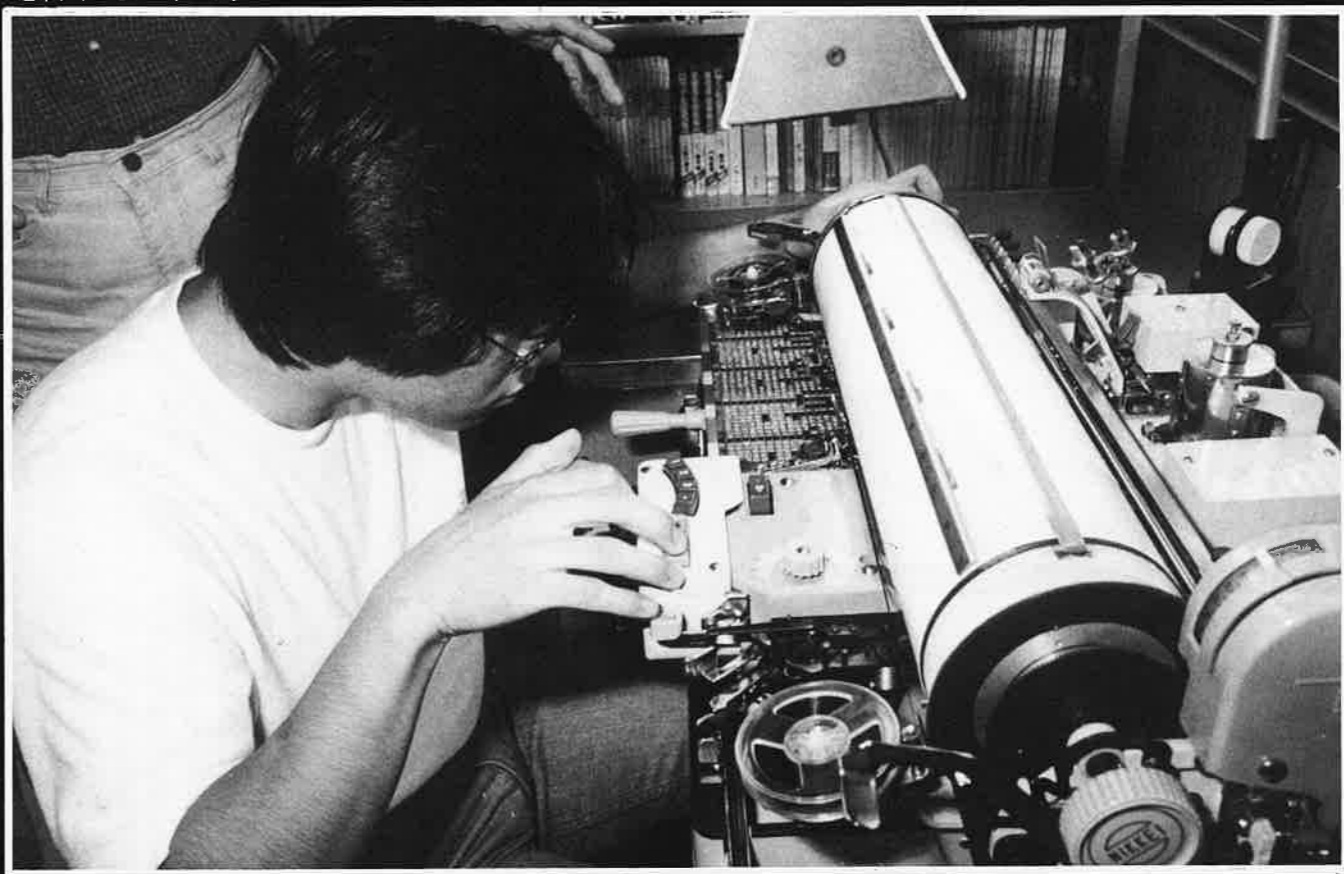


ツゲでできた木ハンのセット。木の乾燥度、弾力性などでツゲが一番。数種類のサイズがある。



木ハンで音符の玉を押す。実にきれいなものだ。読者にお見せできないのが残念である。

近年タイプを利用する浄写屋さんも増えて来た。機械の手前奥に見えるのが各種音符の玉や記号を鋳造したハンである。タイプだと文字も打ち込める。



んにとって命の次に大切な木ハン（音符の玉、符尾、休符、音部記号、調記号などを形どったハンコ、以下単にハンと呼ぶ）だ。
ハンで押す以外の部分、すなわち五線の音符の棒、小節線、連音符の連結線などの直線部分、それにタイやスラーなどの曲線部分はカラス口でひく。
原稿を前にしての手順としては、まず楽譜のレイアウトから始まる。一ページの五線の段数、その間隔、譜めくりを考へての小節の割り振り、一小節中の音符の間隔等、全工程を通じてこのレイアウトが最も重要な作業となる。特に現代曲などの複雑難解な原稿を浄写する場合など、その人の美的感覚も問われることになる。

「だからこの会社でも、この作業だけは大抵社長さんが手がけますよ。」と小原さん。次にカラス口で五線をひく工程に入る。大抵の場合、版下は拡大して作られ、製版時に仕上がり寸法に縮小される。
五線の幅は数種類あり、印刷寸法に従って適当なものが選ばれる。5ミリから8ミリまでの各種が多く使われるそう。小原さんの所には、3.5ミリから18ミリまでの16種類が用意されている（つまりそれだけの種類のハンが揃っている）とのこと。この作業は簡単に見えて実は大変なのだという。

「等間隔で引く苦労、もさることながら、それ以上に重要なのは一

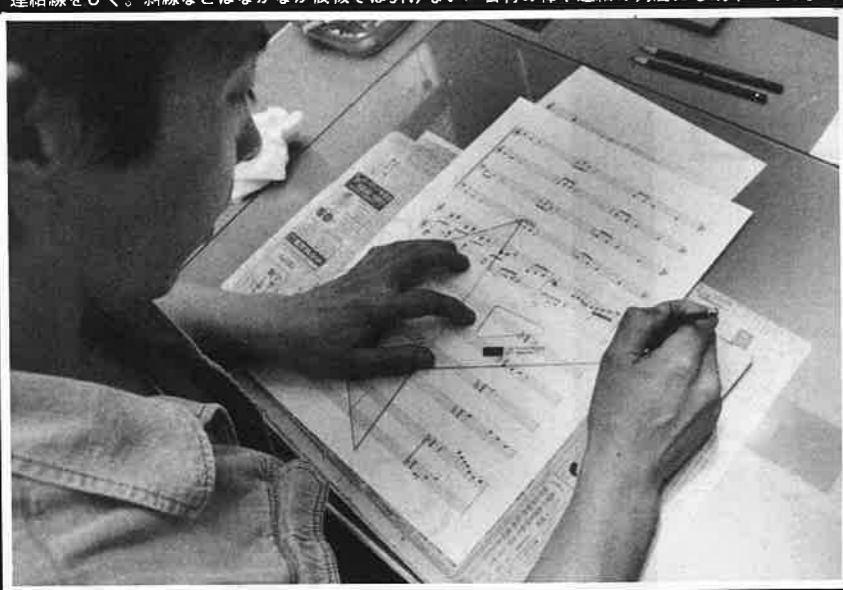


写真ではよく分からないが、市販の雲形にはない曲線をもつ雲形定規でスラーやタイをひく。

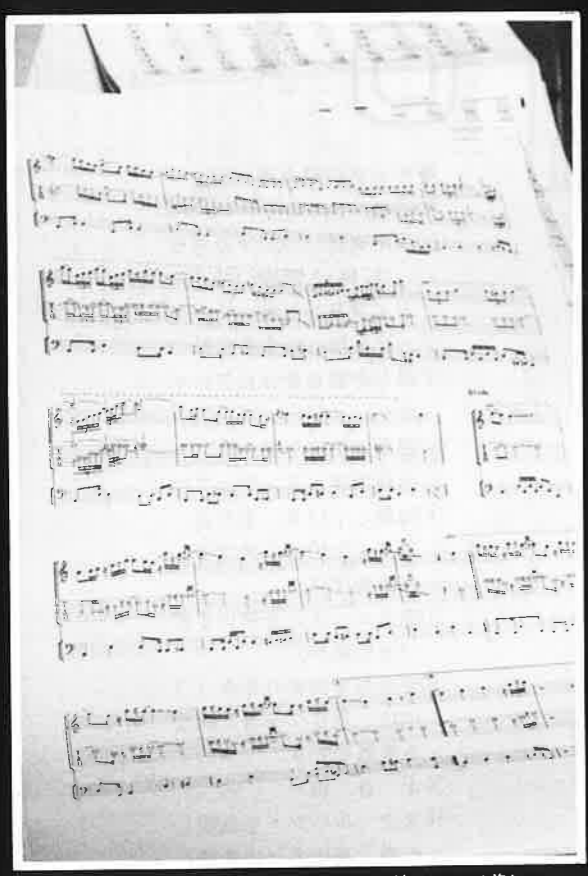
いわばノレン分けた。だからハンの形などに流派が受け継がれていくのだろう。「ペテランになると、ト音記号の形を見れば大体誰の手になるものか分かるものなんです。が、最近では独立すると人のものを真似て樹脂判を作っちゃいますから、流派というのはいまもう有形無実になって来ます。」

彫る人がいなくなったのであれば致し方のないところ。音符の形やト音記号の形には商標登録したいものはないのである。

先にも触れた通り、このハンは五線の間隔に合わせて数種類のセットが揃っている。時には出版社や教科書会社などが



ら、音符の玉の形を指定される場合もある。その場合は、ハンはその会社が所有しているものを借りることになる。しかし、それにしても、OA革命が叫ばれるこの時代にあつて、この一連の作業は機械化できないものなのか？
「大手印刷会社がコンピュータ化を図っています。が、一台何千万という値段。僕も昔から機械化を模索してまして、とりあえず和文タイプを改良して実験中なんです。ハンで押す作業では腕の差が仕上がり歴史と現われてしましますが、このタイプだと誰が打ってもピシッと印字されます。」
より手作業の方が速そうなのが残念だ。
ハンに使うインクは印刷インク。「最近のインクは早く乾燥しちゃうので、ローラーにつけたインクが使えない」と小原さん。なかなか微妙なものである。乾燥といえは、各工程ごとにインクを乾燥させながら仕事を進める手間も大変だ。このハン押し作業。音符の玉のみを一度さつと押し、符尾などを加えるのはこの後の作業になる。
音符の棒、連音符の連結線などはカラス口でひく。連結線は見ていると一度にひかず、数度に分けてひいてあの太さを出す。また、連結線を音符群の上にひくか下にひくかには、ご存知のように規準がある。原稿の間違ひもこの点では多い



印刷される前の版下は独特な「切れ味」を持っていて美しい。

「この雲形も流派があります。よくご覧になると、楽譜によって孤線の引き方やふくらみが違うのが分かるはずですよ。ウチはドイツの楽譜出版社の老舗、ベーター版に従ってらんです。ヨーロッパはスラーはすそ野がちよっと長いんです。孤線中央部の肉厚は、カラス口で2度びきして出すのが小原さんのやり方。とにかく一本のカラス口を自在に操る。孤線の長さ合った雲形の辺を選び出す手順も実にすばい。
「このスラーやタイの孤線を音符間に適切にひくことはコンピュータではま

だ出来ない作業なんです。」と小原さんは笑う。やはり完全自動化なるものは夢のまた夢か？ もっとも職人さんの仕事で奪われるようなことになれば社会問題となるが。以上が大体の手順である。
「景気は？」との質問に小原さんは「日米貿易摩擦と同じような現象が韓国との間で起きてるんです。この仕事は人件費がすべてですから、あちらに対抗するのが難しい。昨年あたりから、攻勢をかけられて、そのあたりを少しくらってるんです。」
このオタマジャクシの「日韓戦争」、かつての「日米戦争」を彷彿とさせる、とはある事情通の話。